

フリーード風

(現場)からの
宮田 守男

(25)

だけでも出荷したい」との悲痛な声が聞こえてくる。

大北地域、特に白馬地域では、収穫時期でも秋雨により思うような農作業ができない状況。一部農家からは、天候に左右される農作業に合わせて、息子たちが職場で休暇が取れないで困る。来年からは、大幅に耕作面積を減らさなくては」と寂しげに話す年配者。だが、現在耕作している多くの水田は、事情により耕作できない農家から譲り受けた水田。返したら「どうなるのか」と気ばかりになる。10月に入っても、里からは「残った農産物が出た。被害農家

ない水田が広がる。従前の集落単位の耕作や規模経営では対応は無理なのかと考えてしまふ。どんな対応が可能かと考えた時、亡き父が青年時代に富山から耕作馬を借り、白馬

へ思い出す。

いる。また所有する農業用機械類も年々古くなり維持管理経費の負担も経営を苦戦させているのが現状なのだろう。現在計画されているのが現状なのだろう。現在計画され、1枚当たりの水田面積の拡大だけでは、乗り切れない状況が予

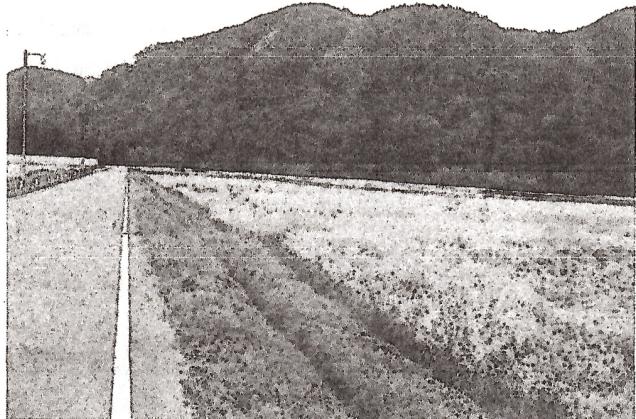
地域農業を守る為には長野県全域を視野に入れた思考が求められている

で耕作して、安曇野に引き継ぎ、最終的に長野市川中島での耕作に馬を使い富山に返した話や地域の長老も昔は、白馬で農作業を済ませ、農業用機械を持参で川中島に出稼ぎに行つた」話など懐かし

かった高価な機械類が、各農家別々に急速に整備された事が本当に良かったのか、今悔やんでも仕方ないことなのだろう。地域で活躍する曾農團体も高齢化が進み、人材確保にも苦戦して

想される、自分達の地域の農業經營を誰に託すのか、大きなエリアの視点から考えなくてはいけない状況に追い込まれている印象を強く持ってしまう。

が、超高齢化社会での地域農業を考えた時、資産意識を抱いた継続の思考では困難さは増すばかりだろう。地域にじりて、農地ではなく、地域存続の為に利



10月に入つても白馬村大出地籍など村内各所に多くの未収穫の稻田が広がっている

用確保すべき土地の状況がどうあるべきなのか。今後に注目して行きたい。(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)